

彼方「かなた」

校長通信
H25.11.20
Vol.24

【無明】

十八日（月）の放課後、学区にある真栄寺のご住職、馬場昭道さんの所に、先生方みなでお話しを聞きに行ってきました。馬場和尚さんは、以前、本校のPTA会長を務めたり、我孫子市PTA連盟会長も務められた方です。また、本校の給食スタート時には、「残菜ゼロ運動」を推進するための講演を行い、『いただきます』は『命を頂きます』ということですよ。』という大切なお話しもしてくださいました。それを皮切りに市内小中学校に「残菜ゼロ運動」を広めていった方でもあります。その和尚さんからとてもいいお話しを聞くことができたのでご紹介します。

サイ族の一部の部族では、つばを相手の頬にかけて挨拶するのもあるそうです。そんな中で、どの国の挨拶がよいかをアメリカの大学で学生が集まって議論したことがあったそうです。その時は、インドの挨拶が一番良いという結果になったそうです。インドでは、胸の前で手を合わせて「ナマステ」と挨拶をします。合掌するのは、相手に両手を差し出し、合わせることで「私は無抵抗ですよ。敵意はありませんよ。」というのを表しているのだそうです。「形や言葉は違っても『挨拶』の持つ心はみな同じ、自分の心を開くということです。」というお話の後は、心のこもった大きな挨拶が本堂に響きました。

その後、目を閉じ、姿勢を正して二分間の黙想を行いました。目を開けるときの二分は早く過ぎてしまいましたが、目を閉じての二分間の黙想は、和尚さんが指摘したとおりとても長く感じました。鳥のさえずり、犬の鳴き声、356号線の車の音、天井のきしむ音等々、いろいろな音が聞こえてきました。それは、目を閉じて、視界から入る情報を遮断した分、聞くことに集中できたからです。「人間は耳が二つに口ひとつ、多く聴いて、少なく言うため」というお話しをしていただきました。ところが現実には、聴かなきゃならないことを聴かず、言っただけでいいことを口にしてしまうことが多いという指摘でした。改めて私自身も生徒のみんなや保護者のみなさん、先生方の声を一生懸命聴かなければならないと強く思いました。みなさんも人の話を何となく「聞く」のではなく、「聴く」の字のごとく、目（相手を）と心を＋（たして）、「聴く」ようにしてみませんか。

最後に「無明」というお話しをしていただきました。「部屋の中で掃除をしているときに太陽の光がスツと差し込んでくると全然見えなかったホコリが辺り一面に立ち上っているのがよくわかる。心も同じで自分自身に光を当てないと自分がどうなのかがよく見えなくなる。良いも悪いも全部丸ごと受け止めて、自分にスポットを当てて生きる。その上で、よい生き方をすることが大切。」というお話しでした。

良い生き方とは、お金や能力がなくとも、自分の体ひとつで人のためにできることを一つでも二つでも行う生き方だそうです。「無財の七施」という教えです。「相手に優しい目差しを送ったり、笑顔で接したり、優しい言葉をかけたり、人が嫌がることでも進んで奉仕したり、心の底から共に喜び、悲しんだり、席を譲ったり、雨風をしのげるように傘を差しかけたりと、すべてに思いやりの心を持って行動することが大切」という教えです。そして、「人間は、いい生き方をしている人に育てられると、いい人になる。オオカミに育てられれば、オオカミのようになってしまう。でもその逆はない。オオカミが人間に育てられても人間のように決してならない。それほど人間は習性を持っていて柔軟な生き物である。だから先生方には、いい生き方をして欲しい。」という私達に対する願いを語られました。

今から一つでも二つでも「無財の七施」を心がけ、学校に関わるすべての人が笑顔で、楽しく過ごせるようにしたいと思いました。

馬場和尚さんには心より感謝です。